
ひさ子

麻真

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひさ子

【Nコード】

N7139E

【作者名】

麻真

【あらすじ】

気がついたら、同級生のひさ子が隣にいた。私は特別彼女と親しいわけではなかったけれど、なぜか彼女にとっても会いたがっていた気がする。そして私は、彼女と不思議な時間を過ごす。

気がついたら彼女が、私の隣にいた。彼女は大学で同じ研究室の同級生、ひさ子。背が高く、スポーツのできる、一見男勝りな明るい人だ。かと思うと、人が気づかないようなところに気がつく女性らしい面もあり、人間関係にもさりげなく気をつかう。さっぱりしていて、言いたいことをポンポン言っているように見えるのだけれど、実は言葉のひとつひとつまでよく考えてしゃべっているので、彼女に悪い感情を持っている人はいない。

私も彼女に好感を持っていたけれど、人気者でいつも人に囲まれている彼女とは、とりたてて親しいわけではなかった。でもなぜか私は彼女にとっても会いたがっていたような気がする。

私たちは並んで机についていて、彼女は私の右側にいた。机の上には一冊ずつ、小さなノートが広げてあり、彼女は黙ってそのノートに何か書き込んでいる。私も、その線もない真っ白いページに、いつも自分の日記にするように、思いついた言葉を並べていた。

それにしても、ここはいつたいどこなのだろう。大学の講義室にしては、少し様子が違う。私たちの他にも誰かいるような気がするのだけれど、目には入らない。

「ねえ、それ見せて。」

彼女がこつちを向いて、明るく話しかけてきた。たいしたことが書いてあるわけではないけれど、普通なら人に見せるようなものではない。

「うん、いいよ。」

けれどそのとき私は、開いたままのノートを、あっさり彼女に渡してしまった。彼女は私のノートを半分上の空で、けれど、いかにも読んでいるようなふりをしながらめくっていった。見たくて見せてと言ったのではないように思える。

「あなたのも見せて。」

もしかして、と思ってかけたこの言葉を、彼女は待っていたらしい。
「うん。」

うれしさを隠すような表情を浮かべながら、彼女は閉じている自分のノートをさし出した。受け取って、私もページをめくった。どのページにも、文字がびっしりと並んでいる。けれど、おかしいことに、読もうとしても文章が読みとれない。文字が小さいせいだろうか。あたりが少し薄暗いせいだろうか。

私はどうしてもそれを読まなければいけないような気がして、目を凝らして必死で文字を追う。けどやっぱり、文字の羅列が目に入るだけで、何が書いてあるのかわからない。彼女にとっても悪い気がしたけれど、私はノートを読むのをあきらめてしまった。

すると突然、彼女は私の前に一枚のサマーセーターをさし出した。色はベージュ。ゆるい編み目のセーターだ。彼女は編み物がうまいということをし、最近誰かに聞いた気がする。

「これ、あなたが編んだの？」

「そう。」

彼女は微笑みながら答えた。

「すごい！こんなに編み目がそろって、手編みだなんて思えないよ。」

確かに彼女の編み物の腕はたいしたものだった。けれど、上手だからほめているというより、私はなぜか彼女を明るいき分にさせなければいけないという強迫観念のようなものを感じて、わざとはしやいだ声で、おおげさにほめていた。そんな私の不自然な態度に気付かない彼女ではないはずだけれど、

「えへへ。」

彼女はうれしそうに笑った。その笑いに、少し無理があるように思えるのは、気のせいだろうか。それに、今日の彼女は、妙に無口だ。いったいどこから出てくるのか、彼女は次から次へとセーターを取り出しては私に手渡した。涼しい色のサマーセーターもあれば、真冬に着るような、ザックリしたのもある。どれもひと目ひと目で

いねいに編んであり、彼女の器用さや、神経の細やかさがあらわれていた。私は一枚ずつ手の上に広げてみては、彼女の腕前をほめたえた。

十枚くらい見せてくれただろうか。もうそれで全部らしく、彼女は元氣のない声でしゃべり始めた。

「もう一枚あったんだけど、ユミちゃんが買ってくれたから。」
ユミちゃんというのは、彼女と仲のいい同級生だ。

「買わなきゃいいのに。だって私もうすぐ…」

うつむき加減でしゃべっている彼女の言葉が途切れ、泣き声に変わった瞬間、私は自然に腕を伸ばし、彼女を抱きしめていた。次第に激しくしゃくりあげだした彼女といっしょに、いつの間にか私も泣いていた。

「ちゃんが悪いのよ！××ちゃんが悪いのよ！　　ちゃんは悪くないのよ！　　ちゃんも悪くないから、何も気にしなくていいのよ！！」

彼女は、だっ子のように頭を左右に振り、涙声をかすれさせたり裏返らせたりしながら、私の知らない名前をあげては、責めたりかばったりした。いつも冷静な彼女が、こんなに取り乱したのを今まで見たことがない。どんなふうになぐさめることもできず、私はただ、彼女をしっかりと抱きしめていた。

しばらく我を失ったように泣きわめき、心の中にたまっていたものをみんな吐き出してしまったのか、私の肩にほほを置いて、彼女は静かに泣き続けた。腕の中の彼女はとても細かった。足に力が入らないみたいで、フラフラしている。それを支えているつもりのも、抱き合っただまといっしょに、足元からゆらり、ゆらり揺れていた。

目頭から、涙が横に伝って落ちる感覚で、私は目を覚ました。うたた寝をしていたらしい。夢から覚めてもまだ、彼女と抱き合っていた感触がそのまま身体に残っている。私は目を覚ましたままの格

好で、声もたてずに涙をぬぐい続けた。梅雨の真つただ中にしてはめずらしく、気持ちいいほどよく晴れた昼下がりだ。

彼女は去年の三月に突然入院し、一年余りの入院生活の末、先月の初めに亡くなった。入院したばかりの頃、一度お見舞いに行ったのだけど、その後は自分の生活の忙しさにまぎれて、ずつと行っていなかった。同じ研究室の人たちは時々顔を出しているようなので、私ももう一度行ってみなければ、と思っていた矢先の訃報。信じられなかった。お葬式には参列させてもらったけれど、雨が降っていたため、棺の窓は開けられることなく、彼女は火葬場に運ばれていた。

お別れした気がしないまま、ひと月以上が経っていた。彼女に会いたかったような気がしたのは、こんな理由があったからだっただ。彼女が編み物が得意だったというのは、お葬式するとき、友人代表の言葉で知ったことだった。

入院中、病状の変化は度々あったと聞いたけど、お見舞いに行つた同級生たちから聞く彼女の様子は、それほど沈んだものではなかった。今年のお正月、彼女がくれた年賀状には、「今年の目標は、みんなと遊べる体力作りなのサ!」と、丸くはずんだ文字が並んでいた。入院が長すぎることに同情することはあっても、いつかは元氣になつて帰ってくるものと、みんなが信じていた。まるで彼女自身、自分がこれほど早く死んでいくなんて思いもせず、去つてしまつたかのようだった。

けれど、お葬式から何日か過ぎ、彼女がガンだったと聞かされたとき、あの敏感な人が自分の病氣に気付いてなかったはずがないと思つた。

「私はもうすぐガンで死んでいくかわいそうな女の子なんだゾー!」

彼女が親しい友達に、おどけた調子で口走っていたという話を聞いたのは、ほんの二、三日前のこと。やっぱり彼女は知っていた。いつも周りに気を配る人だったから、みんなを悲しませないように、

最後まで自分の気持ちを押し隠し、明るくふるまっていたのだ。

ひとりで死んでいくことは、どんなに恐かっただろう。まだ二十一才になったばかりで、やりたいこともたくさんあったに違いない。教師になるという夢を持っていたひさ子。彼女なら、生徒の気持ちがわかるいい先生になったはずなのに。

どうして自分だけが死んでいかなければならないのかと、同じ年頃で、先のある私たちのことを憎みそうになったこともあっただろう。だけど、責める相手などあるはずがないことを、彼女はもちろん知っていた。夢の中でしたように、誰かに感情をぶつけてしまえば、少しは楽になれたかもしれない。けれど、彼女のことだから、いつもそばにいてくれる家族の前でさえ、きつと泣きわめいたりはしなかったはず。ひとりきりで恐怖と戦い、あきらめるということを自分に言いかけながら去っていった彼女は、本当に優しくて強い人だったのだと思う。

私の夢の中で、日記を見せようとしたり、泣き叫んだりしたのは、「本当は悲しかったんだよ、怖かったんだよ」と、誰かに伝えたかったからなのだろうか。去ってしまった今だから、やっと自分に許してやった、彼女の一度だけのわがままだったのかもしれない。「買わなきゃいいのに。だって私もうすぐ……」という言葉は、死んだ人間が触れたものは、あまり気持ちのいいものではなかうという、デリケートな彼女の心遣いかと感じた。

どうしてそれほど親しくもなかった私のところに、彼女は会いに来てくれたのだろう。会いにきてくれたなんてうぬぼれで、私が彼女に会いたいと思っていたために見た、単なる夢だったのかもしれない。どちらにしても、こんなによく晴れた昼間の夢に登場するところが、やっぱり彼女らしいなと思った。

（後書き）

大学時代、私が仕上げていた数少ない作品の一つを、手直しして投稿します。彼女に「せっかく生きてるんだから、できることはちゃんとやりなさい！」って叱られないように、残りの人生は精一杯生きようと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7139e/>

ひさ子

2010年10月8日15時27分発行